

2023年4月2日 礼拝説教要旨

詩編講解説教143 「いのちの道」

詩編143：7～12、ヨハネ14：1～6

この詩編は冒頭「主よ、わたしの祈りをお聞きください。嘆き祈る声に耳を傾けてください」（1節）とありますから、個人的な嘆きの祈り、嘆願に分類されます。詩人は敵に苦しめられ、完全に心が折れ、憔悴しきっている状態です。それゆえに「主よ、早く答えてください、わたしの霊は絶え入りそうです」（7節）と訴えています。この詩人をダビデと捉えるならば、ダビデを苦しめたサウルがダビデにとってどれほど脅威であったかを想像することができます。ではわたしたちにとって自分を苦しめる「敵」とは何でしょうか。

エフェソの信徒への手紙に「わたしたちの戦いは、血肉を相手にするものではなく、支配と権威、暗闇の世界の支配者、天にいる悪の諸霊を相手にするものなのです」（6：12）とあります。ですからここではわたしたちを神さまから引き離す罪の力、悪魔、サタンの存在を考える必要があるでしょう。またサタンはあらゆるものを用いて、わたしたちを神さまから引き離そうと誘惑します。この世の富や権威、あるいは病、死といった試練を通して、あるいはダビデのような実際に自分を攻撃する存在を通して悪魔はわたしたちを罪に陥れます。そしてそのような誘惑に対してわたしたちはあまりにも無防備なのです。前の141編に「わたしの魂をうつろにしないでください」（8節）とありました。この部分は「魂を裸に晒す」という説明をしました。そういう誘惑、危険があるにもかかわらず、魂は裸同然なのです。

この詩編には「魂」（ネフェシュ）、「霊」（ルーアハ）という言葉が繰り返されています（3、6、7、8、10、11、12）。一つの詩編でこれだけ繰り返されるのもめずらしいと思います。この「魂」、「霊」はまさに人間存在の根幹です。神さまとつながる部分です。神さまに命の息を吹き入れられた人間は神さまとのつながりがあるからこそ生きることができます。そこに基本的な聖書の人間理解があります。ところが悪魔はその部分を狙い、攻撃して、神さまから引き離して行きます。しかも裸同然ですからいとも容易くその誘惑に負けてしまう。それはあのアダムとエバの話からも明らかでしょう。簡単に神さまとの約束を破ります。ちなみにヘブライ語で「罪」（ハッタート）は、「迷い出る」という意味があります。神さまのもとから迷い出てしまう。そして魂が神さまから離れてしまうと人間は尊厳を持って生きることができなくなってしまいます。その先にあるものが死です。樂園を追放されたアダムとエバに対して神さまは「塵にすぎないお前は塵に返る」（創世記3：19）と言われました。パウロも「罪が支払う報酬は死です」（ローマ6：23）と述べています。そのことがこの詩編の「とこしえの死者と共に闇に閉ざされた国に住ませようとしています」（3節）「わたしはさながら墓穴に下る者です」（7節）に表されていると理解してよいでしょう。

けれどもこのように神さまから離れ、死に向かって突き進んでいるわたしたちが神さまに向かって向きを直す、立ち返ることが今日の詩編が伝えようとしていることです。「御旨を行うすべてを教えてください。あなたはわたしの神。恵み深いあなたの霊によって安らかな地に導いてください。主よ、御名のゆえに、わたしに命を得させ、恵みの御業によってわたしの魂を災いから引き出してください」（10～11節）「導いてください」「引き出してください」とあります。それは魂が本来のあるべき場所がないことを意味しています。そこから「安らかな地」へ、これは人間の本来あるべき場所、神さまと共に生きる場所、それがあのアダムとエバがいた樂園

であり、神の国と申し上げてよいでしょう。そこへ導き出してください、引き出してくださいと訴えます。そこに人間が命を得る場所があるのです。わたしたちはそこに行かなければなりません。「あなたにわたしは依り頼みます。行くべき道を教えてください」(8節)「行くべき道」とは、神さまに立ち返る道です。詩人はその道を切に求めているのです。

説教の準備のためにわたしが目にした注解書のほとんどがこの143編を悔い改めの七つの詩編の最後のものであると紹介しています。これまで詩編を読んできて、その都度この悔い改めの詩編について触れてきました(6、32、38、51、102、130、143)。ちょうど今日の礼拝から詩編の交読を再開しましたが、今日は第32編でした。そこにも「われ汝を教え、汝を歩むべき道に導き、わが目を汝にとめてさとさん」とあります。新共同訳聖書では「わたしはあなたを目覚めさせ、行くべき道を教えよう」(8節)です。「行くべき道」が出てきます。罪にあるわたしたちはその行くべき道から迷い出ておりました。道を外していたのですが、そこから神さまが求める「行くべき道」に立ち返る。そこにわたしたちが生きる道、本当の命がある。その命に至る道こそ、イエス・キリストに他なりません。そういう意味で、今日の詩編の御言葉もイエス・キリストの救いを豊かに指し示しています。

今日は新約聖書ヨハネによる福音書14章を読みました。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことができない」(14:6)わたしたちはイエス・キリストという道を通して神さまのもとに向かうことができる。キリストがその道になってくださった。道がなければ行くことはなく、真理がなければ知ることもありません。キリストこそがわたしたちを命に導く道であり真理なのです。教会はそのこと救いとして伝えています。多くの人々は救いを求めてさまよっています。道を見出そうとしています。それこそ「道楽」という言葉があるくらい道楽に向かう人もいるでしょう。美味しいものを食べ、旅行に行って、それで魂が満たされると考える人は多い。でもどんなにこの世に安息を見出そうとしてもそれはかりそめのものに過ぎません。どんなに道楽を重ねても、それが救いにはなりません。人は神さまに立ち返らなければならないのです。

今日から受難週に入ります。主イエスの十字架の道行きを辿ります。主は自ら人間の罪の中へ、この混沌とした、迷い出た世界へ足を踏み入れてくださいました。そしてその罪の結末である死を引き受けてくださった。それが十字架です。そして自ら道となられ、命となられてその死の淵からわたしたちを安らかな地へと引き出してくださいました。それがよみがえりです。洗礼を受けてキリストに結ばれているわたしたちはその命の道を自分自身の中に移し込んでいます。もはや迷い出ることはありません。

天の父よ、あなたに背き、迷い出たわたしたちをキリストによって命の道へと立ち返らせてくださる幸いを感謝致します。どのような困難の中にあっても、神さまがしっかりとわたしたちの行くべき道をこの身体に移し込んでくださることを信じさせてください。罪に死に新しい命によみがえらされたキリストをこの身に帯びていることを忘れることがありませんように。主の御名によって祈ります。アーメン。